

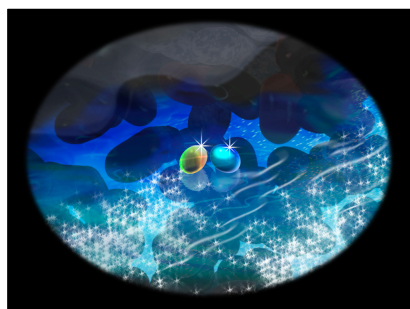
はくちょう座神話

夏の夜空高く、天の川の中に輝く北十字、はくちょう座。

そのくちばしの先に光るふたつの美しい星、二重星アルビレオにまつわる悲しいお話です。 (6分55秒)



1.
それは、神と人間がまだお互いに行き来していた頃のことでした。エリダヌス川のほとりで、仲良く遊ぶ二人の少年がいました。一人の少年の名前は、フェートン、そして、もう一人の少年の名はキグナス。フェートンは、兄のように体の弱いキグナスを気遣い、二人はいつも一緒だったのです。



2.
ふたりの宝物は川の中で見つけたきれいな二つの小石。黄色い小石はフェートンが、青い小石はキグナスが、それぞれ肌身離さずお守りにしていました。



3.
ところが、ある日のこと。いじめられていたキグナスをかばったフェートンは、少年たちから「うそつき」といわれてしまいます。実は、フェートンの父親は、太陽の神アポロンでした。



しかし、それを信じない少年たちは、ことあるごとにフェートンをうそつきよばわりし、反論するフェートンに「本当なら証拠を見せろ!」とせまっていたのです。とはいえ、証拠などあるはずありません。

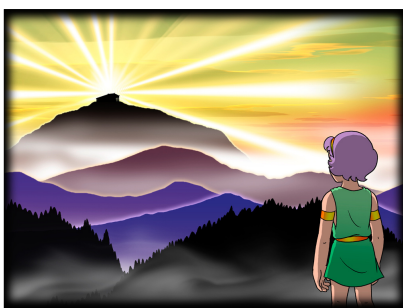


4.
少年たちは立ち去り、あとには、黙り込んだフェートンとキグナスだけが残されました。



5.
「ごめんね、僕のために」あやまるキグナスにフェートンはこう答えました。「君のせいじゃないよ。でも、あんな奴らに馬鹿にされるのはもうたくさんだ!僕は、お父さんの所に行って何か証拠をもらってくる!」

そして、必死で止めるキグナスを振り切って、遠い遠い太陽の神殿へと、向かったのです。



6.
それ以来毎朝、キグナスは、東の地平線の果て、朝焼けに光り輝く太陽の神殿を眺めてはフェートンの無事を祈っていました。フェートンがたった一人であんな遠くを目指しているかと思うと、キグナスの胸は張り裂けそうだったのです。



7.
一方、歩き続けて、ようやく太陽の神殿にたどりついたフェートンは、父アポロンに、訪ねてきたわけを話しました。神の子が、うそつきと呼ばれてはアポロンも放ってはけません。



そこで、
「なんでも望みの物を与えるから、それを証拠にすればよい」とフェートンに約束しました。
ところが、フェートンは、アポロンの乗る太陽の馬車を貸してほしいと、頼んだのです。



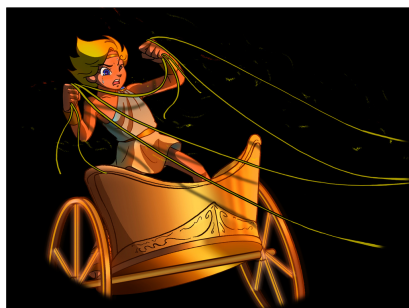
8.
太陽の馬車は、とても少年が乗りこなせるようなものではありません。
しかし、神様が嘘をつくわけにもいきません。
アポロンは、渋々、1日だけ、馬車を貸すことを承知したのでした。



9.
「あれは、フェートンだ!」
その日、いつものように太陽の神殿を眺めていたキグヌスは、躍り出た馬車を操っているのが、フェートンだと、すぐに気がつきました。
「ああ、なんてことを…。神様、どうか無事に西の果てにたどり着きますように」



10.
しかし、キグヌスの必死の願いもむなしく、馬車が突然、めちゃくちゃな方向へ走り出しました。
馬たちが、いつもと違う未熟な乗り手に気づいたのです!



必死に手綱を引くフェートンですが、とても馬たちをおとなしくさせることは出来ません。

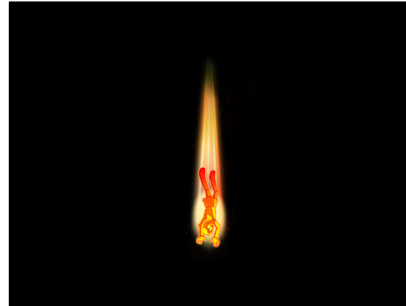


太陽の馬車に焼かれて、あちこちから火の手が上がりました。

こうなっては、アポロンも放っておく訳にはいきません。



11.
「許せ!むすこよ!」
ピシ!



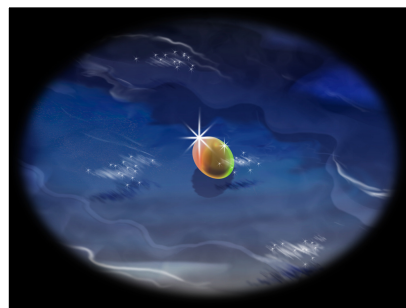
12.
フェートンは、一筋の光となって、エリダヌス川に落ちていきました。



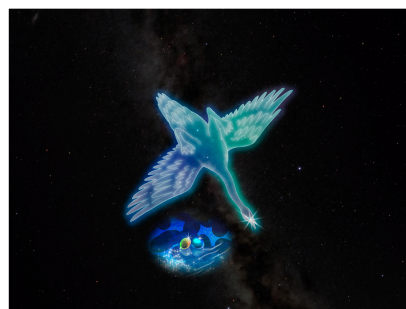
13.
「フェートン!、フェートン!」
キグヌスは、川に入って必死にフェートンを探しました。
その手に、あの青い小石を握ったまま、もぐっては顔を上げ、辺りを見回し、またもぐり……。



14.
いつしか、美しい白鳥に姿を変え、それでも、捜し続けるキグヌス。



そして、やっとの事で見つけたのは、水の中にきらめく黄色い小石だけでした。



15.
キグヌスは、友情の証の小石をくわえて大空に舞い上がり、はくちょうの星座となりました。
今でもキグヌスは、フェートンを探すことをやめません。
そして、くちばしには二つの小石が、二人の心を表すように、永遠に美しく輝いているのです。

語り：向殿あさみ 脚本：高島規子 イラスト：塚田洋子 タイトル CG：NOBO 編集：福留政彦